

趙元任の『ふしぎの国のアリス』翻訳とその文体 三人称代詞の性別分化をめぐって

関 光世

(京都産業大学外国語学部)

Abstract

In the early part of the twentieth century, Modern written Chinese, due to encounters with Western languages, was undergoing significant changes in relation to how to represent gender in third person pronouns. This paper, through an analysis of the reasons for Yuen Ren Chao's translation of "Alice's Adventures in Wonderland" and his solution to the technical problems relating to the translation of the third person pronoun, demonstrates how "她" and "牠(它)" had a high occurrence frequency and usage and that "她" was strikingly close to modern Chinese. The paper also examines the times of the translation, Yuen Ren Chao's enthusiasm for participating in the creation of Modern written Chinese and the possible influence in the latter part by contact with R.F. Johnston.

1. はじめに

『阿麗思漫游奇境記』¹ (以下『アリス』)は、白話運動が高まりを見せる 20 世紀初頭の中国で、アメリカ留学から帰国した直後の趙元任(1892-1982)が、新たな文体への期待を込めて翻訳し、1922 年に出版した Lewis Carrol (1832-1898)著、“*Alice's Adventures in Wonderland*”(『ふしぎの国のアリス』)の白話による翻訳作品である。ここで言う「新たな文体」とは、『児女英雄伝』、『紅樓夢』など清代の章回小説に見られる旧白話文に対して、20 世紀初頭に西洋言語との接触によって生じた新しい白話文を指す。

この時代、知識人たちは「理想的な白話文とは欧化した白話文である」(傅,1919,p.181)との呼びかけに応えるかのように、西洋言語(主に英語)の知識を動員し、旧白話に「破格な拡大使用」(大河内,1962,p.9)を施して外国文学を翻訳した。

旧白話の「破格な拡大使用」の起爆剤となるのが、西洋言語法からの「概念の継承」(矢放 2019)である。1922 年頃、知識人達は、英語の三人称代名詞 “she”の対訳問題に直面していた

SEKI Mitsuyo, “Yuen Ren Chao’s translation of “*Alice's Adventures in Wonderland*” and its literary style--Focusing on the gender differentiation of the third person pronoun,” *Invitation to Interpreting and Translation Studies*, No.20, 2019. pages 1-20. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

(黄, 2007, p.127)。彼らは西洋言語からの概念の継承を中国語の白話文体にどのように活用すべきか、という問題を正面から捉え、試行を重ね、旧来の書面語文体を基にしつつ新しい白話文体を生み出すことを模索しはじめていた。この流れが、新しい白話文創出の礎となったのである。『アリス』が出版されたこの時期はまさにその「初期」に当る、と判断することができる。そしてその流れの中で生じた中国語の新たな語法の特徴を、王力(1900-1986)は欧化語法と呼んでいる。

三人称代詞の性別による使い分け(本稿では「性別分化」と呼ぶ)は、欧化語法現象としてしばしば指摘されてきた²。現在、中国語学習者に「三人称代詞は？」と問えば、直ちに“他、她、它”と答えるだろう。しかし従来の欧化研究では、女性を表す“她”と「モノ」を表す“它”は“他”から分化した欧化の産物であり、この分化は 1920 年代半ばから後半にかけて普及したと説明されている³。『アリス』には、現象的には“她”と“牠(它)”⁴が多用されているにもかかわらず、二十数年後の 1940 年代に言語学者王力が初めて言語学的な視点から欧化語法の記述を行って以降今日に至るまで、欧化語法研究資料としての『アリス』に同様の現象を認め、その価値に着目して考察し、その例文を挙げた先行研究は見あたらない。

本稿では、まず、時代背景及び胡適(1891-1962)や同時代の詩人徐志摩(1897-1931)らとの交友から『アリス』翻訳の動機を多面的に把握・検討する。次に、動機のひとつと考えられる三人称代詞の性別分化を分析の起点に据えつつ、三種類の代詞の出現数と用例を手がかりに、趙が英語語法の概念を継承した結果生じた『アリス』の文体の特徴を考察する。

本稿の目的は、以上の考察を通じてこれまでの欧化語法研究の成果を補完し、『アリス』が中国語の新たな三人称代詞の体系の創出と定着に果たした意義を確認すると共に、20 世紀初頭の白話による翻訳文体の変遷の一端を明らかにすることにある。

2. 趙元任と『アリス』の翻訳

2.1 留学から翻訳まで

「漢語言語学の父」と称される趙元任が、庚子賠款⁵による第二次公費留学生の試験に合格し渡米したのは 1910 年である。同期の留学生に胡適がいた。胡適の「文学改良芻議」(1917)は、傅斯年の「怎樣做白話文？」(1919)と共に白話運動を加速させたことで知られる。特に後者は「理想的な白話文とは、つまりは欧化した白話文であると言える。」(p.181, 1.10)⁶と述べて、広く新しい白話文の創出を呼びかけた。これを契機に中国国内においても白話による翻訳や欧化に対する議論が活発化したが、西洋言語との接触の最前線にいた留学生たちが、このような呼びかけに敏感に反応したことは想像に難くない。

趙と胡適は同じ船で渡米し、共にコーネル大学(Cornell University)で学んだ。当初、趙の専攻は言語学ではなかったが、中国人留学生による月刊誌『科学』の編集に没頭し、自らも翻訳を手がける。その影響で 1915 年頃から次第に中国語の言語学的問題に目を向け、友人胡適と議論を重ねつつ将来を模索した結果、漢語言語学を自らのライフワークと見做すに至ったとみられる(趙・黄,1998,p.72、73、78)。

趙が教授⁷の勧めで『アリス』に接したのもこの頃である。彼は物語に魅せられただけでなく、作

者 Lewis Carroll に自身との共通点を発見してシンパシーを覚え(趙・黄,1998, p.78)、早くから中国語への翻訳を考えていた(2.3 参照)。しかし、実際翻訳に着手するのは 1920 年 8 月に帰国する間際である(趙・黄,1998, p.111)。帰国後の趙は講演のために訪中した英国の学者ラッセル(Bertrand Arthur William Russell,1872 -1970) に随行して通訳を務め⁸、翌年 6 月には楊步偉女史と結婚するなど、公私ともに多忙を極める。そんな中、『アリス』の翻訳は結婚直前の 5 月初旬には概ね完成していた⁹ のであるから、本人が、「この時期の仕事の中で最も関心を持って臨んだのが『アリス』の翻訳であった」¹⁰ と言うとおり、情熱を傾けて取り組んだ渾身の作品であったと言えるだろう。この時期、趙と胡適は頻繁に往来していた。趙はしばしば胡適の家を訪れ、留学時と同様に、音韻学や国語ローマ字化について時を忘れて語り合った。また趙の結婚に際しては、証人として結婚証明書にサインし、自身を「結婚祝を贈った最初の人間である。」と回想している¹¹。『アリス』は、小説の翻訳としては趙の処女作で、その中国語の書名は翻訳を見守った胡適の命名によるものである。¹²

2.2 『アリス』翻訳の動機

趙は『アリス』の訳者序に、「この書の文学的価値は、シェイクスピアの最も真面目な書に比べても十分匹敵すると信ずるが、だがまた別の一派である。」(趙,1922, p.5, 翻訳は中島,2018, p.156 による)と記している。これは『アリス』が文学としては正統からはずれることを認めつつ、児童文学として価値ある別の一派であるとの信念を述べたもので、周作人をして「大胆で公平な批評」(周,1922, 翻訳は中島,2018, p.156 による)と脱帽させた。

作品に対する熱愛と、先にも触れた作者への共感が『アリス』翻訳の根底にあったことは言を待たないが、訳者序の以下の記述からは、趙の新たな白話創出への使命感と熱意が伺える(翻訳は筆者による)。

今は、中国の言語がかくの如く試されている時代だ。この機に乗じ、幾つかの面で実験を行うのもよからう。第一に、本書は白話文を用いなければ「見事に」訳すのは難しい。従って、この翻訳本も白話文の成否を判断する材料として構わない。第二に、本書の多くのものが代詞の区別において、例えば、最後の詩のように、一文中に *he, she, it, they* がいくつか見られるが、これは 2 年前、他、她、牠(它)の区別がなかった頃には翻訳できなかった。第三に本書には十首ほどのナンセンス詩がある。これらを散文調に訳すと無論面白くないし、文言体の詩に訳しては話にならない、従って今はまさにこれらを使って白話詩のスタイルで翻訳を試みるチャンスなのだ、... (趙,1922, p.11)¹³。

趙は「実験」(“试验”)という言葉を使ったが、1918 年から 1922 年まで米英に留学した経験を持つ徐志摩¹⁴ は、詩の白話による翻訳を「興味深い練習」(“有趣的练习”)¹⁵ だと語っている。徐志摩は、未知なる「理想の白話文」は伝統的な旧来の文体と一体何が違い、どこが優れているのかについて、翻訳をとおしてその可能性を研究すべく皆が努力すべきであると考えた。そして西洋言

語との接触の最前線にいる自らがその担い手であるという自覚と信念を持ち、真摯に翻訳を実践したのだ。¹⁶ 筆者の整理したところでは、徐志摩は帰国後から 1926 年までの数年間に、生涯において発表した翻訳作品の約 80%を公表している。その分野は詩にとどまらず、小説や脚本、論文など多岐にわたる。このことは、彼のこの信念の現れと見るべきであり、趙の翻訳に対する姿勢もこれに相通ずるものがある。三人称代詞の処理と、ナンセンス詩の白話スタイルによる翻訳は、趙にとって具体的な研究テーマであり、趙はこれらについての独自の理解を『アリス』において実践し、「理想の白話文」に近づくための議論を喚起しようとしたのである。この意味において、趙の新しい白話文創出に対する熱意を、『アリス』翻訳の動機のひとつに挙げることができるだろう。

さらに翻訳の最終局面において、ある出来事が趙に自信を与え、背中を押した可能性がある。訳者序には「『ふしぎの国のアリス』はこれまで翻訳されたことはない。私の知る限りでは、ジョンストンが彼の学生である宣統帝に通訳して聞かせたことがあるそうだ(趙,1922, p.11)¹⁷。」とある。ジョンストンとは、清代最後の皇帝愛新覺羅溥儀の帝師 R. F. Johnston (1874-1938)である。趙の帰国から翻訳完成までの間、彼と胡適の往来が頻繁であったことは先に述べたが、同じ時期、胡適とジョンストンもまた、1919 年に設立したばかりの国際的な文芸団体—文友会の活動をとおして、頻繁に行き来していた(桑,1999, p.53,58 参照)。流暢な中国語を話したジョンストンは白話運動への関心も高く、胡適の溥儀への謁見を仲介したのも彼である。さらに徐志摩も胡適の紹介でジョンストンと知り合ったと見られる。(ジョンストンと胡適、徐志摩については関,2017 に詳しい)これらを考え合わせれば、趙もまた胡適の紹介で、この時期ジョンストンと面識を得、彼から直接皇帝に関わる内部情報を得た可能性は十分に考えられる。西洋人が『アリス』を中国語に通訳して聞かせたという事実は、趙にとって驚きであったに違いない。すでに翻訳作業は佳境を迎えていた頃ではあろうが、自身が特に問題意識を持って取り組んだ三人称代詞の処理やナンセンス詩の翻訳スタイルなどについて意見を交換したとすれば、翻訳の完成に大きな牽引力となったに違いない。

2.3 『アリス』翻訳の技術的動機とその影響

前節で引用した訳者序に「2 年前、他、她、牠(它)の区別がなかった頃には翻訳できなかった。」とあるとおり、三人称代詞の処理の技術的問題こそ、早い段階で決意していたにもかかわらず、趙が帰国間際まで翻訳に着手しなかった理由である。翻訳の時期から逆算すると、「2 年前」とは、1918、19 年と推測される。1918 年と言えば、周作人(1885-1967)によって初めて“她”の文字が女性を表す人称代詞として公に示され、その後、錢玄同(1887-1939)、劉半農(1891-1934)らとの間で、“她”を含むいくつかの候補をめぐる議論が活発になっていた時期である。その影響で、1919 年 5 月以降、小説や詩において“她”が意識的に使われるようになっていた(黄,2007, p.127-133)。趙が『アリス』の翻訳に着手したのは、まさに三人称代詞の翻訳問題に注目が集まり、知識人達がそれぞれに試行していた時期であった。

趙は『アリス』の出版にあたり、訳者序のほかに十二項目からなる凡例を記しており、その第七項目には、以下のように記されている(翻訳は筆者による)。

“他”，“她”，“牠”：本書の大部分において三種類に分ける必要はないが、原文が特にこの種の区別を指しているものもあり、奇妙な文字を使わざるを得なかったので、思い切って三種類を一律に“他”“她”“牠”と訳した。音はㄉㄩ，一，ㄉㄜとし、複数形は“們”の字を加えて“他們”“她們”“牠們”とした。「王さま」と「女王」の両方を表すなど性別が混合している場合には、フランス語にならって“他們”を用いた(趙,1922, p.18)¹⁸。

「奇妙な文字を使わざるを得なかった」箇所とは、第十二章の長いナンセンス詩を指す。この詩を原文の押韻に倣って中国語においても韻を踏んだスタイルにするため、苦肉の策として“her”に“她”、“it”に“牠”の文字をあてた上で、“她”を“伊”と同音の一(注音字母)と読むよう指定したのである。初版本では、本文中の該当箇所にわざわざ発音を指示する但し書きがある。¹⁹ その結果、整合性を図るため、「思い切って、一律に」全編の三人称代詞を区別した、というのが『アリス』において人称代詞を三種類に使い分けるに至った経緯である。訳者序は、この解決方法に思い至ったことが翻訳に着手した理由のひとつだと語っており、この点は『アリス』翻訳の技術的な動機と言える。

筆者は、欧化語法研究において『アリス』の三人称代詞に着目して考察し、その例文を挙げた先行研究を寡聞にして知らない。最も早く言語学的見地から欧化語法を整理し、記述した王力ですら趙元任及び『アリス』について触れていない²⁰のは、上述のような経緯も理由のひとつかもしれない。

経緯はどうあれ、趙は『アリス』において三人称代詞の性別分化について新たな提案を行った。それは当時の人々にどのように受け取られたのだろうか？

晩年に趙が受けたインタビューがある(翻訳は筆者による)。

Levenson: ...昨夜、エバーハルト(Wolfram Eberhard,1901-1989)²¹と話した時、彼は恥ずかしそうに『ふしぎの国のアリス』のどの版本も読んでいないと認めました。英語、ドイツ語、そして中国語もです。[笑]でも、彼が30年代に中国にいた頃、あなたの翻訳はよく話題に上りました。それから、多くの女の子がアリスという名前でした。これはきっと貴方の翻訳の影響でしょう。なぜ処女作にこの作品を選んだのですか？

趙元任:私はコーネル大学在学中にルイス・キャロルの本を好きになり、それらを中国語に翻訳できたら面白いだろうと思ったのです。...

.....

Levenson: ...この本の中国での反響はどうでしたか？

趙元任:『アリス』はよく売れました。

.....

Levenson: どんな人達が『アリス』を読んだのでしょうか？大人ですか？それとも自分の子供たちに読んで聞かせたのですか。或いは子供たちが読んだのでしょうか？

趙元任: わかりません。私が出会った読者は、大人のほうが多かったです。私は自

分の子供たちに読んでやったことがあります。

(罗斯玛丽・列文,2010,p.113-114)

『アリス』は売れ行きが良く、児童文学書でありながら、自分の子供をアリスと名付けるほど大人が夢中になり、大きな反響を巻き起こしたことがわかる。これは『アリス』の文体が広く一般の人々にも受け入れられたことを物語っている。

大河内は、1921、2年頃の白話による翻訳文体について、翻訳者による新しい白話の創出を「白話の破格な拡大使用」という言葉で説明し、「《it》にあたる《他、牠》を濫用に近く用い、さらには指すものの種類によって新たな漢字を作ってはどうかという意見まで出た。」と、悪戦苦闘ぶりを紹介しながらも、「《it》にあたる《牠》は現在の書面語で欠かすことのできないものであるが、初期の欧化文体のもたらした大きな成果の一つであろう。」と評価している(大河内,1962,p.5)。上述の趙による三人称代詞の翻訳の経緯も、まさにこの悪戦苦闘と同質のものである。つまり、彼はより緻密な西洋言語の三人称代詞のアイディアを継承し、目の前の白話に破格な拡大使用を施した。これは新たな人称代詞の体系の創出に他ならない。訳者序はまさにその概念を継承した瞬間についての詳細な解説と言える。大河内(1962)は当時の“她”の状況には言及していないが、『アリス』では“她”と“牠(它)”が現象としては多用されており、極めて顕著な特徴を呈している。それらが一般の読者に与えたインパクトの大きさは想像に難くない。この作品が受け入れられ、大きな反響を呼んだという事実から、『アリス』の人称代詞がその後の漢語書面語における人称代詞の定着に与えた影響もまた大きいと考えられる。

3. 『アリス』に見られる三人称代詞の性別分化

本章では、欧化をめぐる王力と賀陽の観点の踏まえ、『アリス』における三人称代詞の使用状況及びその特徴を観察し、それが翻訳者のどのような意識や理解を表したのか、また当時の一般の人々にどのように映ったかを考察する。

3.1 欧化語法研究と三人称代詞

現代漢語において三人称代詞と言え、以下のような説明が一般的である。

「“他(她、它)”は“我”、“你”以外の第三者を代表し、漢字表記では、“他”は男性、“她”は女性を表し、“它”は事物を表す。“他”、“她”、“它”の発音はすべて同じ/tā/である。……三人称複数は、漢字表記では“他们”は男性を、“她们”は女性を表すが、発音はともに同じ/tāmen/である。三人称複数の中に男性、女性の両方を含む場合には“他们”を用いる。“它們”はあまり用いられない。」(『現代中国語文法総覧』1996, p.59)

三人称代詞を性別によって三種類に使い分けるのは、20世紀初頭に西洋言語(主に英語)の影響を受けて起った欧化語法現象であると言われている。はじめて言語学的見地から欧化語法に言及したのは王力である。彼は主に『中国現代語法』(1943)、『中国語法理論』(1944)、『漢語史

稿』(1958)において欧化語法に言及し²²、「賛成、反対ではなく事実を述べる」²³ 姿勢で当時観察された欧化現象を記述し、整理した。これが欧化語法研究の出発点となっている。王力は欧化語法を「西洋文化の影響を受けて生まれた中国の新たな語法を我々は欧化語法と呼ぶ。それは文章にのみ見られ、口語ではあまり見られない(王,1943, 1.2)。」²⁴と定義した。「新たな語法」には、伝統的な漢語に元来存在はしたが、西洋言語の影響で使用が顕著になったものも含まれるというのが、王力の比較的緩やかな解釈であり、その後の欧化研究においてもこの定義は概ね継承されている。本稿もこれに従う。

その後、欧化語法研究は、王力の挙げた現象の補完と精査を目指すかのような時期²⁵ に入りますが、若干の例文を根拠に現象の存在を指摘する旧来の方法では、例文の数の不足や出典の偏りによって、客観的な根拠に乏しかった。

21世紀に入り、欧化語法研究を新たな段階に進めたのが賀陽(2008)である。賀陽は、ある欧化語法の現象が五四期(1919～)以降に起こったものか、書面語のみに見られるものか、西洋言語の影響によるものか、の3点について、膨大なコーパスを活用して例文を収集すると同時に、統計に基づき得られたデータを根拠に考察した。その結果、欧化を巡る議論に客観的な根拠を与えることに成功したのである。

3.2 王力と賀陽の観点

王力は、西洋言語の影響によって人称代詞の形態に生じた重要な変化として、“他”の性別分化、“它們”の応用、の二点を挙げた(王,1958, pp.267-268 参照)。

性別分化について王(1943)は、「欧化した漢語」では、英語の“he, she, it”に相当する“他、她、它”及びそれぞれの複数形“他们、她们、它們”が存在することを指摘すると同時に、その実用性について肯定的な見方を示した。さらに、このような分化は「1917年に始まり、初期には文字だけでなく音声上も区別しようとの主張もあったが、失敗した(王,1958,p.268)。」と振り回している。

賀陽は、旧白話(『水滸全伝』『西遊記』『紅樓夢』『兒女英雄伝』)と当代文学(『駱駝祥子』『苦菜花』ほか)における三人称代詞としての“他、她、它”の出現頻度を示し、例文をあげた上で、「三人称代詞の性別分化は、1920年代の半ばから後期には、書面語においてすでに十分普及していた。…1950年代には、現代漢語の文法書や教科書などにおいて、性別分化を紹介するようになった。このことから、遅くともこの頃までに、この種の欧化語法現象は、現代漢語の人称代名詞の使用において新たな規範となっていたことがわかる(賀,2008, pp.66-67)²⁶。」(翻訳は筆者による)と総括した。

三人称代詞の性別分化には“她”及び“它”への二種類の分化が含まれる。しかし、賀陽が上記主張を導くためにあげた用例のうち、“它”の用例は1930年代の1例のみで、“他”から“她”への分化を示す例が多数を占め、偏りが見られる。

「モノ」を表す人称代詞“它”について、王力は当初「“它”は中国語の中では本来とても少なく、机を“它”と呼ぶなどということは極めて珍しい。無形物を“它”で表すに至っては、極めて稀である(王,1943,p367)²⁷。」、「多くの状況において、“它”の字は実に中国の習慣に合致していない;使わ

なくて構わないところではやはり使わない方が良い(同,p.368)。』²⁸ と、否定的な態度を滲ませた。しかし、十数年後の『漢語史稿』では、「本来、モノを表す“他”(すなわち“它”)は漢語では非常に珍しいものだ。複数形に至っては絶対に使わない。しかし外国語の語法を吸収した関係で、書面語においても次第に“它們”がみられるようになり、典型的な白話文の著作においてすら見られるようになった(王,1958,p.268)。』²⁹ と、態度を軟化させた。女性を表す“她”とは異なり、“它”は受容までにより長い期間を要したことが伺える。

賀陽は、前述の旧白話作品において、「モノ」を表す三人称代詞の“它”が皆無³⁰であったことを統計によって示し、近代文学作品との比較から、旧白話以降の“它”の増加を実証した(2008,p.72,表3-1参照)。また五四期以降の使用例として、1919年以降の用例を5例挙げている。しかし王力が「極めて稀である」と述べた無形物を表す“它”については触れていない。

複数形の“它們”について、賀陽は統計に基づき、旧白話において“他們”は例外なく人を表したことを示す(2008,p.78,表3-3参照)と同時に、1920年代以降の用例を挙げ、“它們”は英語の影響で五四前後から「モノ」を表す人称代詞の複数形としての使用が始まったと指摘した。賀陽があげた“它們”の用例のうち最も時期が早いのは、冰心(1900-1999)による1923年の用例だが、その他は全て1925年以降30年代のものである。

コーパスを使用した統計結果を根拠とする賀陽の手法は画期的ではあるが、“它/它們”については1925年以前の使用状況に関する観察が十分であるとは言えず、さらに深い考察を加える余地があると考えられる。

3.3 『アリス』における三人称代詞の使用状況

趙は、英語の三人称代名詞の体系からアイデアを継承し、『アリス』において、文字を“他”“她”“牠(它)”、発音をㄊㄩˊ, ㄏㄜˊ, ㄊㄞˊ(ピンイン表記ではそれぞれ/ta/, /yi/, /te/)とし、それぞれに“們”を付して複数形とする新たな体系を考案し、翻訳に実践した。これは漢語の人称代詞が現在の体系を形成する欧化の過程において、1920年代初頭のひとつの具体例と見ることができる。本節では、“她/她們”と“它/它們”の使用状況、動物と無生物の擬人化、“它/它們”の文成分などの問題について、今日一般的に欧化とみなされている現象が、1922年の時点でどのような形で実践されていたのかを、それぞれの代詞の出現頻度と用例を手がかりに考察する。

表1は、三種類の代詞及びその複数形の出現数と全体に占める割合を示したものである。

	他	他們	她	她們	牠(它)	牠(它們)	計
出現数	218	149	656	24	200	37	1284
割合(%)	17.0	11.6	51.1	1.9	15.6	2.9	100.1

表1 『アリス』における三人称代詞の出現数とその割合

3.3.1 女性を表す“她/她们”の使用状況

表1から、『アリス』では女性を表す“她”が656例で51.1%を占め、最も多く見られることがわかる。本書の主人公が少女であることを考えれば当然だろう。用例を観察すると、アリス以外の女性とわかる登場人物(料理女、公爵夫人、女王)には、擬人化した場合(女王は無生物のトランプである)を含めてほぼ“她”が用いられている。³¹ 複数形“她们”についても、女性であることがわかる場合(料理女と公爵夫人、三人の幼い姉妹、アリスと公爵夫人など)には“她们”が選択されている。また趙自身、凡例七で、「性別が混合している場合には、フランス語を参考に“他们”とした(2.3参照)」と、複数形における“他们”の優位性にも明確に言及している。用例を観察してみると、その他にも「子供たち」や「みんな」など性別が問題にならない、或いは不特定の場合も性別の混合とみなして“他们”を選択していることがわかる。

現代漢語の知識をもって『アリス』における女性を表す“她/她们”の用法を観察した場合、3.1の冒頭で紹介した現代漢語の解釈に照らしても、発音を除けば、つまり書面語としては、現在と何ら異なる点はなく、現代漢語の雛形と言うこともできる。

三人称代詞を文字だけでなく音声的にも区別するという提案は、後に淘汰されて行くが、物語をとおして“她”及び“她们”の文字が合計680例もみられる作品は、この時代『アリス』において他にはなかったのではないか。³² 折しも“她”を巡る議論が活発に行われ、注目が高まっていた時期(2.3参照)であることを考慮すれば、『アリス』における“她/她们”が読者に与えた衝撃は大きく、その後の“她/她们”の定着に一定の影響力を発揮したのではないかと考えることができる。

3.3.2 “它/它们”の使用状況

表1から、“牠(它)”の出現頻度が“他”に迫るほど高いことにも気づくだろう。

1920年代初頭から相次いで翻訳作品を発表した徐志摩について、彼の16作品208360字を対象に同様の統計をとったところ、“它”が全体に占める割合は3%であった。また、徐志摩において“它”及び“它们”の用例が安定して見られるようになるのは、おおよそ1925年以降であることもわかっている。³³

さらに、賀(2008)は、老舍(1899-1966)の長編小説『らくだのシアンツ』(《骆驼祥子》,1936)において“它”は2%、馮德英(1935-)の『苦菜花』(《苦菜花》,1958)でも4%との統計を示している(p.75,表3-1参照)。これらは中国語による創作作品であって、翻訳作品と単純に比較することはできないが、どちらも『アリス』以降十数年から数十年後の作品であることを考えれば、これは、『アリス』における“牠(它)”の出現頻度が、当時としては異例の高さであったことを明確に示すものである。

(a) “它”

『アリス』にみられる200例の“牠(它)”のうち、153例が動物を表し、中には擬人化したものも含まれた。王力が「極めて珍しい」とした“桌子”(テーブル)“干糖果”(ボンボン)“房门口”(ドア)などの無生物を表したものは35例(17.5%)で、擬人化されたものは見当たらない。また、無生物の中には、王力が「極めて稀である」と述べた無形物を表す“牠(它)”も2例含まれる。例(1)の“公爵夫人的

話”(公爵夫人の話)と例(2)の“时候”(時)を表すものである(翻訳は生野幸吉訳『ふしぎの国のアリス』福音館文庫 2004 年刊、下線と注記は筆者による。以下同様)。³⁴

例(1)

原文: “I think I should understand that better,” Alice said very politely, “if I had it written down: but I ca'n't quite follow it as you say it.”

第九章 (p.121, 1.5)

中国語訳: “我想你要是把它写下来, 或者我会懂一点儿;像你那样说, 我一点儿也听不懂。”(“它”=公爵夫人的话) (p.76, 1.15)

日本語訳: 「もしそれが紙に書いてあるのでしたら」とアリスはたいへんていねいに申しました。「もっとわかりが良いと思います。でも、おっしゃるだけではわかりかねますわ」 (p.137, 1.3)

例(2)³⁵

原文: “I think you might do something better with the time,” she said, “than wasting it in asking riddles that have no answers.”

第七章 (p.90, 1.11)

中国語訳: 她道, “有的这样问没有答的谜儿把好好的时候糟蹋了, 不如还是用它做点有用的事罢。” (p.58, 1.2)

日本語訳: 「あなたがた、もうすこしましな時の使いようがあると思うわ」とアリスは言いました。「答えの出っこのないようななぞなぞをかけて、時をつぶすよりはね」 (p.106, 1.8)

さらに、例(2)のアリスに続いてぼうし屋が語った言葉が下例(3)である。この中で、趙は原文の①“it”、②“him”を、①“它”、②“他”と使い分けて翻訳し、擬人化することで、アリスとの対比から親和性の違いを表現することに成功している。三人称代詞の性別分化なしに、このような原文の細かな感情を区別することは困難だっただろう。これは、「人の感情に訴えることに長けた白話文(“善于入人情感的白话文”傅,1919,p.181)」に近づいた実例と言える。

例(3)

原文: “If you knew Time as well as I do,” said the Hatter, “you wouldn't talk about wasting ①it. It's ②him.” 第七章 (p.90, 1.14)

中国語訳: 那帽匠道, “你要是像我这样同时候熟, 你就不会说用①它嘞。时候是个②他。” (p.58, 1.4)

日本語訳: 「わたしが知っているていどに、あんたにも時というものがわかってるなら、」とぼうし屋が言います。「つぶすなどとは言わんだろうがね。時はいきものだけ」

(p.106,1.11)

(b) “它們”

三人称代詞の複数形は、英語では“they”のみであるのに対し、漢語では“他们”“她们”“牠(它們)”の三種類にわかれるため、翻訳者の選択が反映されることになる。『アリス』では、表1で示した37例の“牠(它們)”のうち34例が動物、3例が無生物を表していた。動物の34例には擬人化したものも含まれた。無生物については、“梯子”(はしご)“餅(パイ)”³⁶“紙牌(トランプのふだ)”のうち、“紙牌”を除いて擬人化はみられない。“紙牌”の例を含め、擬人化については次節で考察するが、趙には当時すでに、擬人化していない動物と無生物については“牠(它們)”を使用するという意識があったのではないかと予見できる。

例(4)

原文: “Where's the other ladder? —Why, I hadn't to bring but one. Bill's got the other—Bill! fetch it here, lad! —Here, put 'em up at this corner—No, tie em together first—”
第四章 (p.45,1.3)

中国語訳: “还有一个梯子呢? 唉, 我本来只有一个能带得来; 还有那个在毕二爷那儿——毕二爷快拿来? ——来, 搁在这个犄角儿上——不行, 先把它们绑在一块儿...”
(p.30,1.7)

日本語訳: 「もうひとつのはしごはどこだ? ——何、おれは一つだけ持ってくればよかったんだぜ。もう一つはビルが持ってるよ——おい、ビル! こっちへはこんでこい! ——ここだ、この角に立てかけるんだ。——いや、まず二つをつなぎ合わせろよ。——」
(p.58, 1.12)

例(5)

原文: I gave her one, they gave him two,
You gave us three or more;
They all returned from him to you,
Though they were mine before. 第十二章 (p.164, 1.16)

中国語訳: 她们拿三我拿七,
你给我们二十一。
你还他来她还你,
其实它们是我的。 (“它們”=餅) (p.104, 1.26)

日本語訳: ぼくは女に一つやり、やつらはあいつに二つくれた、
君はぼくらに三つか、もっとたくさんくれた。
それはみなあいつから、君のところへもどっていった、
もとはと云えばぼくのものだったんだ。 (p.184, 1.1)

『アリス』における“牠(它)”の使用頻度は極めて高く、読者に強い衝撃を与えたことは想像に難くない。また、王力が「極めて珍しい」と記した無生物を表す“牠(它)”は、この時すでに一定程度(17.5%)見られた。さらに、無形物を表す“牠(它)”、無生物を表す“牠(它)們”も使用例が確認できた。これらの用例は、従来の研究では不十分な1925年以前の用例を補完するものである。

3.3.3 擬人化と“牠(它)”の選択

『アリス』では、「人」以外に“毕二爷”(ビル)や“惰儿鼠”(眠りねずみ)など多くの擬人化された動物、そして“皇帝”(王さま)や“皇后”(女王)などの擬人化された無生物を“他”で表している。旧白話において、“他”は人間のみならず、動物や無生物にも用いることがあった(太田,1957, p.100)。擬人化された動物や無生物を“他”で表すのは現代漢語の用法にも通じる。しかし、『アリス』においては、前節で触れたように、擬人化した動物に“牠(它)”も同時に使われていた。つまり“他”と“牠(它)”が併用されている。その使い分けは概ね原文の代名詞と一致するが、一致しないものもあり、この不一致についてさらに考察を深めると、その根底に趙自身の「動物と無生物は“牠(它)”で表す」という意識をくみ取ることができる。

例えば、第六章では、公爵夫人の元から「あかちゃん」を抱いて出てきたアリスが、途中でその「あかちゃん」がブタに変わってしまったことに気付く。ここで、原文ではいずれも“it”であるにもかかわらず、中国語では、アリスがそれを人間の子供だと認識している間は“他”を、ブタと認識してからは“它”を使用している。

例(6)

原文: Alice caught the baby with some difficulty, as it was a queer-shaped little creature, and held out its arms and legs in all directions, “just like a starfish,” thought Alice.
第六章(p.77, l.7)

中国語訳: 阿丽思很费事地接住那小孩子, 这孩子很不好抱, 他的样子很古怪, 手啊, 脚啊, 四面八方地伸出去, 阿丽思想他好像是个五爪海鱼似的。

(p.50, l.9)

日本語訳: あかちゃんは奇妙なかつこうをした小さな子で、手足をてんでな方向に突きだしますので、アリスはこの子を受けとるのに少々苦勞しました。「ヒトデにそっくり」とアリスは思いました。

(p.92, l.9)

例(7)

原文: …it was neither more nor less than a pig, and she felt that it would be quite absurd for her to carry it further.

So she set the little creature down, and felt quite relieved to see it trot away quietly into the wood.

(p.79, l.7)

中国語訳: 这简直就是不多不少的一只猪就是了。她觉得这样东西再抱着他³⁷ 岂不是笑话吗?

所以她就把它放下地上, 她看它不声不响地走入树林里去, 觉得倒也放心。

(p.51, l.10)

日本語訳: あかちゃんはまぎれもなくブタなのです。そこでアリスは、こんなブタの子をこれ以上かかえて歩くなんて、まったくばかげていると思いました。

その小さいきものをおろしてみますと、ブタは平気でトコトコと森のなかへはいつてゆくので、やれやれ助かったと思いました。

(p.94, l.11)

さらに、3.3.2(b)で述べた、無生物を表す“牠(它)们”の3例のうち、唯一擬人化がみられたトランプの例では、以下のとおり、全編で唯一トランプに対して“它們”を使っている。

例(8)

原文: At this the whole pack rose up into the air, and came flying down upon her: she gave a little scream, half of fright and half of anger, and tried to beat them off,...

第十二章 (p.168, l.11)

中国語訳: 正说着那全付的纸牌都腾空起来飞下来打在她身上: 她一半害怕地一半生气地急叫一声, 拿两只手去要挡掉它们, ...。

(p.107, l.18)

日本語訳: それを聞くと、トランプのふだはみんな空中に舞い上がり、アリスめがけてひらひらと落ちかかってきました。アリスは、こわいやら腹が立つやらで、小さな声で悲鳴をあげ、手をあげてはらいのけようとしたましたが、...

(p.188, l.12)

これは物語の終盤でアリスが夢から覚める直前の場面である。『アリス』においてトランプは王さまや女王を含め完全に「人」扱いであったが、ここでは原作の挿絵が示唆するように(手足が描かれていない)普通のトランプである。トランプが自ら“腾空起来”(舞い上がる)ことはないため、若干の擬人化が感じられるものの、その程度は著しく低い。この状況下で趙は原文の“them” に対して“牠(它)们”を選択している。

以上の使い分けから考慮するに、『アリス』において、趙にはすでに、擬人化していない動物と無生物については“牠(它)”を使用するという弁別表現の意図・意識があったと認めることが可能である。

3.3.4 “它/它們”の文成分について

人称代詞の文成分について、賀(2008)の統計では、18世紀半ばに書かれた『紅樓夢』前80回のうち、三人称代詞“它”は4761例見られた。そのうち、「モノ」を表したのは64例(1.3%)、さらにそのうち主語となったものは6例(9.4%)、目的語が55例(85.9%)、連体修飾語が3例であった。これ

に対して、当代文学作品³⁸では、主語となったものが63.1%に増加している。賀陽はこれを旧白話以降の書面語における顕著な変化ととらえ、英語では“it”が比較的自由に主語となることから、この現象が西洋言語(英語)の影響を受けたもので、欧化と言えると結論づけている(賀,2008,pp.82-84)。

『アリス』における“牠(它)/牠(它)们”の文成分は以下のとおりである。

	主語	目的語	連体修飾語	その他	計
牠(它)	81 (40.5)	86 (43)	23 (11.5)	10 (5)	200
牠(它)们	24 (64.9)	10 (27.0)	3 (8.1)	0 (0)	37

表2 牠(它)/牠(它)们の文成分 出現数(%)

この結果から、『アリス』においては、主語となる“牠(它)”と“牠(它)们”が、すでに旧白話から一歩踏み出し、当代文学作品に近い傾向を見せていることがわかる。

4. 『アリス』翻訳の意義と影響

趙元任は、20世紀初頭、日々西洋言語との接触の中に身を置き、当時の白話文に問題意識を持ちつつ、早くから翻訳を決めていた愛読書の『アリス』を念頭におきつつ、白話運動の動向に注目していた。“她”を巡る議論に啓発され、『アリス』の人称代名詞を翻訳する方法に思い至ったことで技術的な障害が解消された。加えて「理想の白話文」創出と翻訳を呼びかける国内の声を受け、西洋言語との接触の最前線にいる自らがその担い手たろうとする信念と情熱が、ついに趙元任を『アリス』翻訳という壮大な「実験」に突き動かしたのである。さらに翻訳の過程で、R. F. Johnstonと具体的な意見交換があり、翻訳の完成に向けて大きな牽引力となった可能性は高い。

人称代詞の処理は趙にとって「白話文の成否を判断する材料(2.2参照)」として供する重要な内容であった。アリスは“她”という人称代詞を与えられたことで、西洋の伝統に則った女性としての特性が鮮明に備わった。また、“他”との併用は見られるものの、“牠(它)”の用法には「擬人化していない動物と無生物は“牠(它)”で表す」という趙の意識が読み取れた。その結果、女性と男性、人と「モノ」の違いが明確になり、物語全体をより生動的で親しみやすくすることに成功した。さらに、“她/她们”の用法が書面語としては現代漢語の雛形とも言えること、無生物を表す“牠(它)/牠(它)们”がすでに「極めて珍しい」という程度以上に見られること、無形物を表す“牠(它)”や無生物を表す“牠(它)们”についても用例を確認できたこと、主語となる“牠(它)”の増加がみられること、など、1920年代初頭の翻訳文体において、すでに旧白話とは一線を画し、現代漢語の方向に一歩踏み出していると見られる用法を確認することができた。特に強調すべき点は、“她”と“牠(它)”が、当時としては異例なほど多く使われた、という客観的事実であり、読者に強い印象を与えたと考えられる点である。

『アリス』は当時大変売れ行きがよく(2.3参照)、児童文学書でありながら、むしろ大人の読者に

大きな反響を呼んだ。このことは紛れもなく、趙の翻訳が、彼が実践した人称代詞の性別分化も含めて、当時の一般の読者に受け入れられ、広く浸透したことを意味するものである。

以上から、『アリス』が比較的早い段階で、現代漢語の人称代詞の形成と定着に果たした役割は大きいと言える。

また、本稿が挙げた用例は、先行研究で不足が見られた 1920 年代初頭の用例を補完するものである。

.....

【謝辞】

本稿の研究は JSPS 科研費の助成を受けたものである。(課題番号 17K02753)

また、本稿の執筆にあたり御指導頂いた、京都産業大学の矢放昭文名誉教授に深く感謝申し上げます。

【著者紹介】

関 光世(SEKI Mitsuyo) 京都産業大学外国語学部教授。サイマル・アカデミー大阪校、中国語通訳者養成コース講師。専門は中国語学、中国語通訳・翻訳。連絡先: guanksuc@cc.kyoto-su.ac.jp

.....

【註】

- 1 『アリス』の初版本は繁体字、2002 年版は簡体字で出版された。本稿の考察にあたっては、両者を丹念に参照したが、例文には、2002 年版に従い簡体字を採用した。また、訳者序及び凡例の引用についても初版本を基に簡体字で引用した。
- 2 王力 (1943, pp.365-370)、(1944, pp.268-269, pp.476-482)、(1958, pp.267-268)、北京師範学院 (1959, p.187)、顧百里(1985, pp.75-88)、賀陽(2008, pp.64-89)などに見られる。
- 3 王力は“‘他’‘她’‘它’的分別与其说是欧化，不如缩小范围，说是英化。”(1958, p.477) (“他”“她”“它”にわかれたのは欧化というよりもむしろ範囲を狭めて英語化である。)(翻訳は筆者)と記し、同時期の太田(1958, p.100)も「《他》は、人間(男女)のみならず動物や無生物にも用いるが、これを《他》《她》《它》などと書き分けるのは民国以降のことで、いわゆる欧化語法である。」としている。
- 4 『アリス』初版本では、“牠”の文字を使用している。王によると、性別分化にあたり、先に“牠”が現れ、次第に後発の“它”が優勢となった (1944, p.478)。本稿では、趙の選択を示す場合は“牠(它)”とし、例文では 2002 年版に従い“它”と表記する。
- 5 義和団事変後に清朝政府が欧米諸国に支払った賠償金。アメリカはその一部を清華大学の設立や中国人留学生の受け入れなど教育面の支援にあてた。
- 6 原文は以下のとおり。“这理想的白话文，竟可说是欧化的白话文。”
- 7 趙・黄編, 1998, p.69[注 1]参照。趙に本書を紹介したのは W.A. Hurwitz 博士である。
- 8 講演は 1920 年 10 月から翌年 7 月まで、北京、上海、杭州、南京、長沙、保定など中国各地で行われた (趙・黄, 1998, p.102 参照)。

- 9 胡適は 1921 年 5 月 6 日の日記に“十二时, 去看赵元任, 他译的《Alice in Wonderland》差不多译完了。这部书译得真好。”(十二時、趙元任を訪ねる。彼の手による Alice in Wonderland の翻訳はほぼ完了している。本当にうまく訳されている。)(陳・李,1998, p.107)(翻訳は筆者)と記している。
- 10 原文は以下のとおり。“但我最感兴趣的是翻译《爱丽丝漫游奇境记》, 这是我的处女作, 由胡适命的书名, 1922 年载上海出版。”(趙,1997, p.164)
- 11 趙・黄,1998, pp.107-108 に結婚当日の様子が胡適によって回想されている。
- 12 注 10 参照。
- 13 原文は以下のとおり。“现在, 中国的言语这样经过试验的时代, 不妨乘这个机会来做一个几方面的试验:一, 这书要是不用语体文, 很难翻译到“得神”, 所以这个译本亦可以做一个评判语体文成败的材料。二, 这书里有许多玩意儿在代名词的区别, 例如在末首诗里, 一句话 he, she, it, they 那些字见了几个, 这个是两年前没有他, 她, 牠(它)的时候所不能翻译的。三, 这书里有十来首“打油诗”, 这些东西译成散文自然不好玩, 译成文体诗词, 更不成问题, 所以现在就拿他来做语体诗式试验的机会, ...”
- 14 徐志摩は英国から帰国後、詩や小説など多くの翻訳作品を発表し、後には編集者として多くの翻訳作品を『晨报副刊』や『新月』に掲載した。彼もまた新しい白話の創出に尽力した人物と言える。
- 15 “但我以为翻诗至少是一种有趣的练习, ...”(韓,2005, p.469) (しかし私は詩の翻訳は少なくとも興味深い練習だと思っている...。)(翻訳は筆者)
- 16 徐志摩の翻訳に対する姿勢は『征翻詩啓』(1924.3.22『晨报副刊』)において顕著に見られる。以下に筆者による日本語訳を引用する。原文は韓, 2005, p.164 参照。

我々が期待するのは、真剣な翻訳をとおして、中国の文章が開放後、緻密な思想(考え)や規範化された声調や音節を表す可能性を研究し、新たに発見された疑問に答える道具に果たしてどの程度の弾力性、柔軟性、一般的適応性があるのかを研究することだ。一体伝統的な旧来のスタイルと比べて何が違うのか。優れていると言うなら、どこが優れているというのか。...なぜ旧来の詩のスタイルでは表せなかった意気盛んなトーン(調子)が、今創成期にある新たなスタイルの詩であれば、満足とは言えないにしても多かれ少なかれ大よそ伝えることができるのか? この点にもし根拠があり、共通の認識であるなら、我々は新たに切り開かれた道筋とその放つ光を頼りに、それぞれが、同時に皆が共に努力すべきではあるまいか。この先により喜ばしく驚くべき、信ずるに足る発見があるかどうかは神のみぞ知るだ。

- 17 原文は“阿丽思漫游奇境记这部书一向没有经翻译过。就我所知道的, 就是庄士敦(R.F.Johnston)曾经把他口译给他的学生宣统皇帝听过一遍。”
- 18 原文は以下のとおり。「他」, 「她」, 「牠」: 在这书的大部分里没有分三性的必要, 但是有时候原文里的话是特指这种区别的, 就不得不用那些怪字, 所以索性就一律把三性译作「他」, 「她」, 「牠」音去丫, 一, 去せ, 复数就加「们」字, 成「他们」, 「她们」, 「牠们」, 假如指各性混杂的, 例如皇帝和皇后并称, 就援法文成例, 亦用「他们」。

19 該当箇所は第十二章の以下2か所である。(下線は筆者)

(1)

原文: “They told me you had been to her,

And mentioned me to him:

She gave me a good character,

But said I could not swim. p.164, l.3-6

中国語: “他们说你见过她 (“她”音 yì),

曾经对他提起我,

说我品行并不低,

就是怕水又怕火。 p.104, l.18-21

(2)

原文: My notion, was that you had been

(Before she had this fit)

An obstacle that came between

Him, and ourselves, and it. p.164, l.19-22

中国語: 她还没有发疯前,

你们总是讨人嫌,

碍着他同她同它 (“它”音 tā),

弄得我们没奈何。 p.105, l.8-11

- 20 王力が欧化に言及した際実名を挙げたのは、筆者の知る限り執筆当時すでに故人であった魯迅と徐志摩の二人である。(王, 1944, p.435 参照)
- 21 Wolfram Eberhard(1901-1989)はドイツ系アメリカ人の人類学者、民俗学者、東洋言語学者。著書に『古代中国の地方文化: 華南・華東』(日本語訳)がある。
- 22 注2 参照。
- 23 王は繰り返し「賛成或いは反対という態度を持つ必要はない」(“咱们不必抱有赞成或反对的态度。”) (王, 1958, p.334)「ここには模倣した事実があるのみで、論理的な是非はない。」(“这上头只有模倣的事实, 没有逻辑上的是非。”) (王, 1944, p.469)と述べており、その姿勢は終始変わらない。
- 24 原文は以下のとおり。“受西洋文化的影响而产生的中国新语法, 我们叫它做欧化的语法。它往往只在文章上出现, 还不大看见它在口语里出现。”
- 25 この時期のまとまった研究には、北京師範学院(1959)、顧百里(1985)、謝耀基(1989)などがある。
- 26 原文は以下のとおり。“到 20 世纪, 20 年代中后期, 在书面上对第三人称代词加以性的区分已十分普遍, ……到了 20 世纪 50 年代, 现代汉语语法论著和教材已普遍介绍了第三人称代词在性上的区分, 可见至迟到这个时候, 这种欧化语法现象已经成为现代汉语书面语人称代词使用上的一种新的规范。”

- 27 原文は以下のとおり。“中性的第三人称代词，中国语里本来极少极少。把一张桌子，叫做‘它’已经是很少见的了；至于把一种无形的物叫做‘它’，尤其是绝无仅有。”
- 28 原文は以下のとおり。“但是，在多数情形之下，‘它’字实在太不合中国的习惯了；凡是可以不用的地方，还是不用的好。”
- 29 原文は以下のとおり。“本来，指物的‘他’（即‘它’）在汉语里是非常罕见的，至于复数形式更是绝对不用了。但是，由于吸收外国语语法的缘故，在书面语言里也渐渐有‘它们’出现了，甚至出现在典范的白话文著作里，例如...”
用例として魯迅の『夏三蟲』(1925)と『毛沢東選集』(1952)を挙げている。
- 30 “它”は旧白話でもなかったわけではないが、その用法は現代語の“他”と同じで、「モノ」を指しているわけではない。例えば“將它二人去見海濱王畢，來日入城。”(二人を連れて海濱王に謁見すれば、明日入場する) (『新編宣和遺事後集』18.b.2)。賀の統計は、氏が調査された4作品ではその通りであろうが、旧白話すべてにおいて“它”が使われなかったということではない。
- 31 過渡期における揺れとみられる現象も存在する。例えば“阿丽思不懂为什么那公爵夫人的声音在句子的半当中就消灭了，他膀子底下搀住的那个膀子也抖了起来了。”(2002,p.77,1.8) (...アリスと組んでいた夫人の腕がぶるぶるふるえはじめたのです。)ここではアリスに対して“他”を使っており、説明がつかない。
- 32 黄,2013,p.132によると、王統照の小説『她為什麼死』(1919)には88例、俞平伯の小説『狗和褒章』(1920)には40例の“她”が見られるが、『アリス』には遠く及ばない。
- 33 下表は徐志摩の翻訳小説にみられる三人称代詞の出現頻度を表したものである。

翻訳年	題名	他	他们	她	她们	它	它们	計
1923	一个理想的家庭	119	7	26	13	0	0	165
1923	巴克妈妈的行状	78	5	137	1	0	0	221
1923	园会	66	50	220	12	3	4	355
1923	玛丽玛丽	930	251	1924	96	35	37	3273
1925	夜深时	27	5	4	0	0	0	36
1925	幸福	71	27	231	9	7	0	345
1925	生命的报酬	47	24	157	6	0	0	234
1925-26	赣第德	971	431	205	23	12	9	1651
1926	刮风	21	7	58	7	4	0	97
1926	一杯茶	40	6	177	5	3	1	232
1927	毒药	6	4	81	0	6	0	97
1928	万牲园的一个人	195	25	19	3	9	23	274
1930	蜿蜒：一只小鼠	166	13	59	0	51	2	291
1930	苍蝇	123	7	2	5	25	0	162
1930	Darling	183	40	19	0	2	0	244
1931	半天玩儿	335	23	107	50	22	12	549
	計	3378	925	3426	230	179	88	8226
	%	52%		44%		3%		

表3 徐志摩の翻訳作品における三人称代詞の出現頻度

- 34 徐志摩の翻訳作品『玛丽玛丽』(“The Charwoman’s Daughter”,1923年翻訳)には、夏、冬、問題、光明、愛、恨み、中庸の道、真理など無形物を表わす“它”や“它們”が観察された。翻訳文体では

早い時点でこのような用法が見られたことを示している。

- 35 本例の“它”は英語訳の“it”と対応していないが、“它”が“时候”を表すことは明らかである。
- 36 原文では“tarts”(p.146, 1.2)、日本語訳は「パイ」(p.165, 1.1)だが、中国語ではパイやタルトを含め、ケーキ類は全て“餅”で表すことができる。
- 37 ここでは、アリスが「あかちゃん」をブタと認識した後にも関わらず“他”を使っている。注現時点では、31と同様、過渡期における揺れと理解するしかない。
- 38 統計の材料としたのは1996年の雑誌『散文』『小説選刊』『求是』である。

【引用文献】

[中国語]

- 北京师范学院中文系汉语教研组(1959).《五四以来汉语书面语言的变迁和发展》商务印书馆
- 陈漱渝·李文儒主编(1998).《胡适日记》中国现代作家日记丛书 山西教育出版社
- 傅斯年(1919). 怎样做白话文?《新潮》第1卷第2期 pp.171-184.
- 顧百里(1985).《白話文歐化語法之研究》台灣學生書局
- 关光世(2017). 徐志摩与帝师庄士敦—以庄氏收藏中的《猛虎集》签名本为端绪—『京都産業大学論集』人文科学系列第50号 pp.131-143.
- 韩石山编(2005).《徐志摩全集》第一卷·散文(1) 天津人民出版社
- 贺 阳(2008).《现代汉语欧化语法现象研究》商务印书馆
- 黄兴涛(2007). “她”字的故事——女性新代词符号的发明、论争与早期流播 pp.125-159.
[Online]<http://publications.nichibun.ac.jp/ja/item/kosh/2013-03-15/pub> (2018.11.16 閲覧)
- 罗斯玛丽·列文森(采访), 焦力为(译)(2010).《赵元任传》河北教育出版社
- 桑 兵(1999). 胡适与国际汉学界《近代史研究》1999年第1期 pp.49-68.
[Online]http://jds.cass.cn/cbw/jdsyj/qwty/201605/t20160506_3328358.shtml
(2018.11.5 閲覧)
- 王 力(1943).《中国现代语法》商务印书馆 2011年版
- 王 力(1944).《中国语法理论》《王力文集》第一卷 山东教育出版社 1984年版
- 王 力(1958).《漢語史稿》中華書局 2013年版
- 謝耀基(1989).《現代漢語歐化語法概論》光明圖書公司
- 赵新那·黄培云编(1998).《赵元任年谱》商务印书馆
- 赵元任(1997).《从家乡到美国 赵元任早年回忆》责任编辑:钱丽明 学林出版社
- 赵元任译(1922).《阿麗思漫遊奇境記》(英) Lewis Carroll 著 商务印书馆
- 周作人(1922). 阿麗思漫遊奇境記《晨报副镌》1922.3.12

[和書]

- 大河内康憲(1962). 「白話による初期の翻訳文体について」『中国語学』118号 pp.1-13.
- 太田辰夫(1958). 『中国語歴史文法』江南書院 2014年朋友書店版
- 中島長文訳注(2018). 『周作人読書雑記3』平凡社
- 矢放昭文(2019). 「商業交易と概念の継承」『東方』461号(予定) 東方書店

刘月华・潘文娉・故韡著 相原茂監訳(1996).『現代中国語文法総覧』くろしお出版

[例文出典]

Lewis Carroll (2015). *Alice's Adventures in Wonderland*: Macmillan Publishers Limited

Lewis Carroll 著 赵元任译(2002).《阿丽思漫游奇境记》商务印书馆

Lewis Carroll 著 生野幸吉訳(2004). 福音館文庫『ふしぎの国のアリス』福音館書店